

平城京右京八条一坊十三坪・十四坪 発掘調査現地説明会資料

1985年12月14日
奈良国立文化財研究所
大和郡山市教育委員会

本調査は、大和郡山市北部清掃工場の周辺整備事業に伴う調査である。発掘調査は大和郡山市九条町において1985年10月から実施しており、現在進行中である。調査面積は約3000㎡である。

調査地は、奈良時代には平城京の南部、右京八条一坊十三坪と十四坪にあたる。十三坪の北西部では本年の7月から9月まで発掘調査が行われ、金属関係の工房とみられる遺構・遺物が出土した。今回はひき続いてその北に接する地を調査した。その結果、十三坪と十四坪を分ける坪境小路および小路両側溝を検出し、この両側溝から遺物の出土を見た。また掘立柱建物・井戸・堀によって構成される奈良時代の宅地が明らかになるとともに、産屋遺構（うぶやいこう）・胞衣壺（えなつぼ）が発見され、大きな成果を得た。

遺構 検出した遺構は掘立柱建物28・掘立柱堀 9・築地 3・井戸 4・土器埋納遺構 6・土壌などである。これらの遺構は大きく4時期に区分される。まず各時期の概要を述べ、次に井戸・土器埋納遺構についてふれる。

I期 十三坪・十四坪が築地堀で区画される時期、十三坪では4分の1町の宅地割となり、築地に接して2間×2間の総柱の倉庫が建てられる。十四坪内は築地堀によって東西に2分される。

II期 十三坪はI期とほぼ同じである。十四坪は掘立柱堀によって宅地が区画される。32分の1町とI期に比べ宅地割が細分する。三つの宅地では、東に廂をもつ南北棟掘立柱建物を西側に建て、東側に井戸をおく。規格的で典型的な宅地と考えられる。

III期 十三坪は、南北棟掘立柱建物を主体とする。十四坪は、掘立柱建物・掘立柱堀が一部改修されるが、32分の1町の宅地割が継承される。東南の宅地にある建物20は内部に土器埋納遺構21（胞衣壺）をおき、産屋と考えられる建物である。

IV期 十三坪は東西棟掘立柱建物を主体とする。十四坪は、2条の南北溝によって東西に区画される。西側の宅地は南北棟掘立柱建物を主体とする。

井戸 井戸側はいずれも方形で縦板組である。井戸63は縦板組井戸側の下に横板を組んでおり、改修をうけた可能性がある。

土器埋納遺構 土師器皿4・5枚を伏せておくもの、土師器甕を逆さまに伏せるもの、土師器皿を伏せた上に土師器甕を被せるもの、土壌中に土師器皿をたてかけて埋納したもの、以上4種がある。

遺物 坪境小路の側溝を中心として多数の遺物が出土した。中でも南側溝（溝9）から出土した羊形硯・冠帽・三彩・土馬や、産屋遺構から出土した胞衣壺などが特筆される。

羊形硯 平城京左京四条四坊九坪での出土に次ぐ2例目である。やや小形であるが造形、手法が良く似る。体部を硯として使用したものと思われる。

冠帽 繊維を編みあげ漆を塗布している。漆紗冠とよばれ、正倉院宝物中や平城宮、平城京八条三坊十坪で出土している。

三彩埴 厚さ約1cmほどの薄い板状を呈する。垂木先や隈木蓋などの道具瓦か、装飾埴の一種と考えられる。

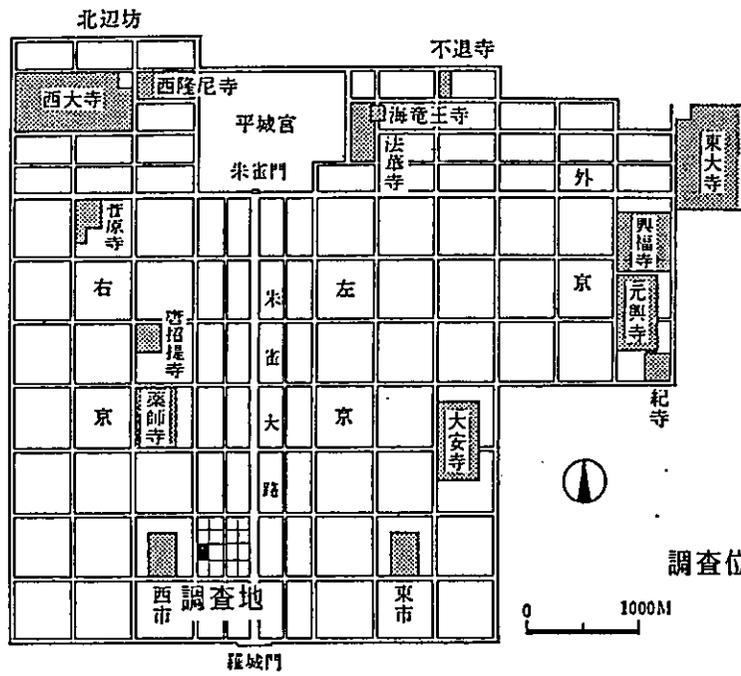
胞衣壺 産屋遺構（建物20）内の土器埋納遺構21より出土。須恵器の杯のなかから和同開珎5枚と墨が検出された。平安時代末の文献に、男子の胞衣を墨、筆とともに埋納する記述がみられる。平城京右京五条四坊三坪に次ぐ2例目である。

土馬 坪境小路南北両側溝や、坪を東西に2分する溝28、29などから大量の土馬が出土した。なかには、鞍を表現した奈良時代初期のものが1点ある。

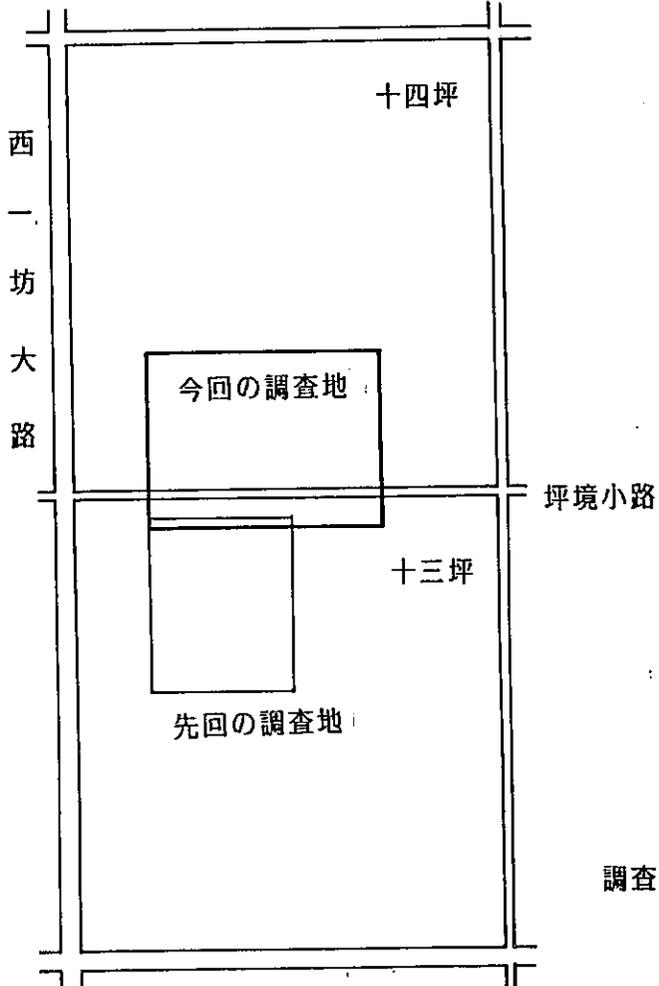
まとめ 今回の調査では、以下の諸点を成果としてあげることができる。

1. 築地や掘立柱堀を用いた区画施設の存在と、32分の1町という宅地割りが明らかになった。
2. 32分の1町の宅地内では、東面する廂付きの掘立柱建物を主屋とし、井戸1基が付属するという構成が明らかとなった。
3. 胞衣壺の埋納される、産屋とおもわれる遺構を検出した。

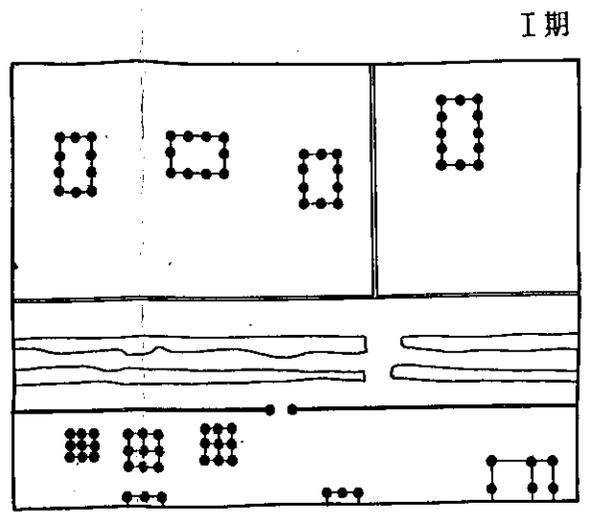
十三坪では、先回の調査で工房の存在が推定されている。今回調査した十四坪の西南部は、宅地割りや産屋の存在などから住居区画として使用されていたことが推定される。



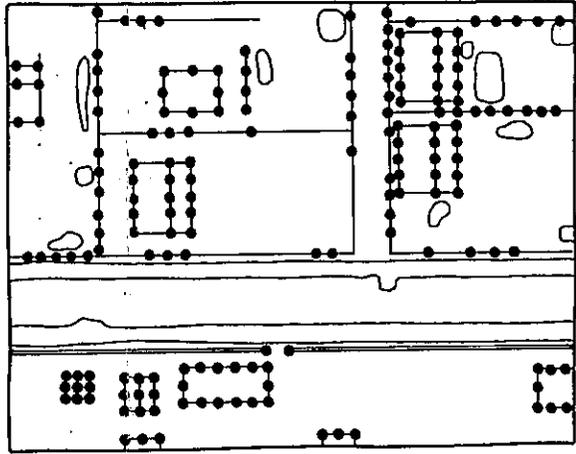
調査位置図 1



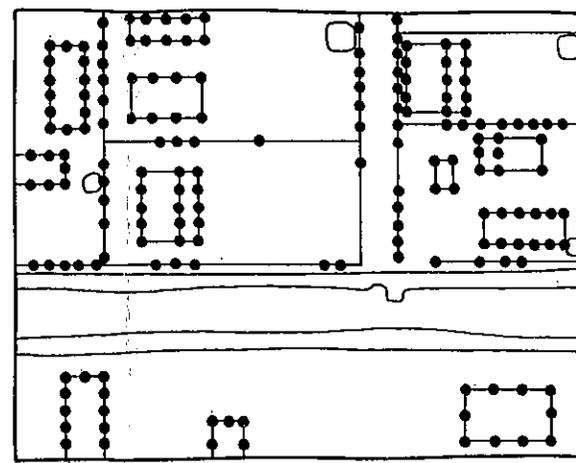
調査位置図 2



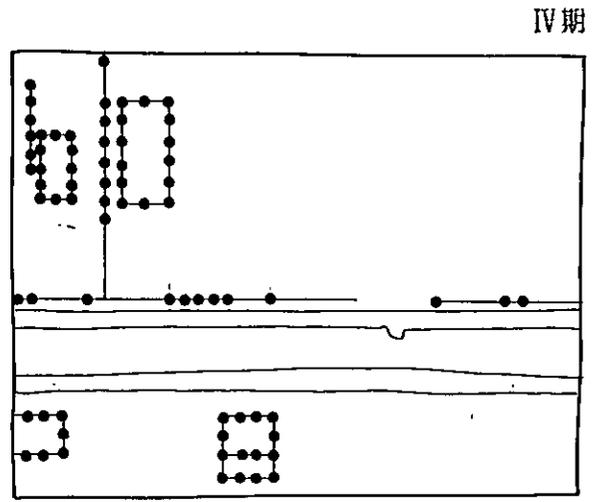
I期



II期



III期



IV期

遺構変遷図

調査遺構図

